

## 講演③

# 神籠石系山城の捉え方

― 築城年代・築城主体論の克服 ―

講演者紹介

向井 一雄（むかい かずお）

関西大学経済学部卒業。関西大学考古学研究室で考古学を学ぶ。1991年から日本及び韓国、中国東北部に遺る古代朝鮮式山城を研究・調査する研究者間のネットワーク機関として古代山城研究会を組織し、現在、古代山城研究会・代表を務める。専門は日本考古学。

# 講演①「神籠石系山城の捉え方」築城年代・築城主体論の克服

古代山城研究会代表 向井一雄

こんにちは。古代山城研究会代表の向井です。私は、東京に住んでおり、今日は多摩ニュータウンから参りましたので、多分、発表された先生方の中では明治大学に一番近いんじゃないかと思っています。

## はじめに

私に与えられたテーマは「神籠石系山城」についてということで、"シンロウセキ"と書いて"こうごいし"と読むんです。知らない方もいらつしやると思うんですが、まず最初に神籠石のお話、何故こういう名前になっているのかという話をして、それから、最近の研究の話をしたいと思っています。

今、映っていますのは阿志岐山城という、大宰府の近くで九九年に古代山城研究会の中嶋さんという会員の方が新しく見つけた、古代山城の一つです。（写真56）列石が二段積みになっていて、下にもう一つ地覆石があるという変わった構造になっています。



## 一・神籠石とは何か

### 神籠石論争

今日のお話は研究史の話と最新の研究の話ということになっています。まず研究史の方なのですが、神籠石という、山城としては変な名前だなと思われると思いますが、こういう名前に決まった経緯、それをご説明したいと思います。

神籠石論争という言葉が今までの発表の中で出てきたかと思うんですが、明治の終わりぐらいから大正にかけて、日本の考古学とか歴史学会で論争が行われました。古代山城の遺跡がその頃発見されたのですが、実は江戸時代の久留米藩士である矢野一貞や、福岡藩の貝原益軒も古代山城の遺跡について本に書いております。矢野一貞は磐井の反乱を起こした、筑紫の君磐井が造ったものだと、そういうことを書いております。

神籠石論争のきっかけになったのは小林庄次郎さんという、東京大学の学生さんだったんですが、この方が九州の調査旅行の中で高良山の列石遺構を見て、それを報告したことから始まったんですが、もう既に論争の一〇年くらい前に久米邦武や、何人もの学者が知っていたようです。これは高良山という久留米市にある、今、高良大社という大きな神社がありますが、その江戸時代の絵図です。赤丸の所に神籠石があるん



写真56 阿志岐山城の列石・土塁

ですが、ちょっと拡大してみましょう。神籠石という字が見えると思います。祠みたいになつてゐる所にその岩があつたんですが、手前には古代山城の列石が転がっています。

神籠石論争は、山を巡る列石の遺跡を靈域説だという人と、山城説だという二手に分かれて論争が行われました。大論争になりました、最終的には山城説の方が若干有利というところで論争が終わっています。今、論争というと相対立して全く相手の意見を聞かないという感じだったと思われるかもしれませんが、それは間違いでして、平面プランを見ますと、朝鮮の城郭と非常に似ているということで、朝鮮の山城と関係がある遺跡だという認識はお互いに共有していたようです。最終的に列石の上に何かあるのかというところが論争の焦点になっていたようです。ただ、当時発掘調査も行われなかつたので、この点が解明できなかったということです。

### 神籠石遺跡の発掘調査

論争のその後なんですが、昭和の初め頃に高良山とか、女山とか、次々に史跡の調査が行われています。これは福岡県で行われたり、佐賀県で行われたりしています。その中で、ここに図面を載せてありますが、これが列石です。列石の上に何か土盛のようなものが書いてあるんですが、これが土塁だという指摘が既にこの段階でされています。それから、國學院大学の大場磐雄先生、祭祀考古学の第一人者の先生ですが、大場先生も「城塞の一種なる事疑うべからず」ということで、この当時の見解を後に本に書いておられます。し



かし、昭和七年から神籠石遺跡の史跡指定が始まって、史跡の名称として、〇〇神籠石という名称が付けられてしまいました。

それからだいぶ経った戦後一九六〇年代、発掘調査がいよいよ行われることになって、九州の佐賀県武雄市、武雄温泉という大きな温泉がある所ですが、ここで、おつぼ山という遺跡が見つかりました。それから、もう一つは石城山です。山口県の光市になりますが、神籠石の遺跡が初めて発掘調査されました。列石の上に土塁のようなものがあるということはある程度予想されていて、発掘調査をしてみると、これが土塁です。これが列石になるんですが、版築土塁が確認されて、やっぱり山城だろうということになりました。

ただ、このように列石の前から妙な柱穴が出てきました。柱の間隔は三メートル間隔や、一・八メートル間隔で、これは一体何だろうということで、当初「逆茂木説」というのが唱えられました。亀田先生のお話の中で版築工法というお話がありましたが、その中で堰板や堰板の支柱というお話があったと思います。版築には支柱が必要なんですが、この版築工法に対する技術的な認識がどうも当時はまだ不足していたようです。最終的に、この柱は版築に関わるものだとして現在考えられています。

### 柳田國男の神籠石批判

さて、神籠石についてなんですが、柳田國男、皆さん、ご存じですよ、日本民俗学の泰斗です。柳田國男が実は喜田貞吉の靈域説に大反対してるんです。『石神問答』という本があります。今では柳田國男全集

に入っていますので簡単に読めますが、この中で、神籠石という言葉は列石のことじゃないということになり厳しく書かれています。当時は「かうご石」と書いて「こうご石」と読んでいるんですが、神籠石というのは大きな石もありますし、小さな石もあるんですが、石単体の名称であると。「磐座」と書いて「いわくら」と読みますが、岩石を信仰の対象にすることを「存じだ」と思います。そういう磐座や石神の名称であると言っています。

今、古代山城と思われる列石遺構について、神籠石という呼称を使うべきではないという、こういうことを柳田國男が明治・大正の時点で、既に指摘していました。ただ、喜田貞吉は靈域説を主張していますので、神籠石という言葉は「神が籠もる石」と書くので非常にロマンチックというか、靈域説を支える言葉として使用を止めようとせず、最終的に史跡の名称になってしまったという、こういう経緯があります。

### 磐座・石神としての神籠石

この地図は磐座や石神としての神籠石の分布図ですが(図45)、全国で一四〇カ所ぐらい見つかりました。私が調べたのが、二〇〇六年に九州国立博物館でシンポジウムがあった時で、その時はまだ五〇カ所ぐらいしか見つからなかったんです。柳田國男は一五カ所ぐらい、明治時代ですが、もう全国でそれぐらいの数を調べ上げています。北は、不確かなものを入れると岩手県まで、宮城県のは確実です。南は大隅半島ですから鹿児島まであります。

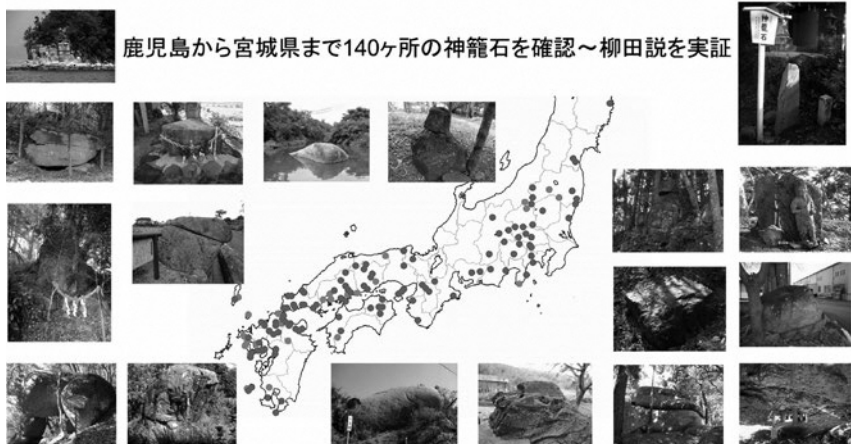


図45 磐座・石神としての神籠石の分布



写真57 賀茂神社の神籠石



写真58 皮籠石

関東地方にもありまして、左の方のは群馬県桐生市にある賀茂神社という、かなり古い神社ですが、神社から少し入った山に神籠石があります（写真57）。三メートル四方の巨大な岩です。この岩に神が降臨したという伝承があるんです。それから、こちらの方は「皮籠石」と書いて「こうごいし」と読むんですが（写真58）、福島県の小野町、リカちゃんキャッスルがある町です。小野町のこの神籠石については、ここに小さな石碑のようなものが建っていて、「二十三夜塔」という、十五夜のお祭月見とはちよつと違うんですけれども、そういう月待ちのお祭



写真60 香合石



写真59 川子石

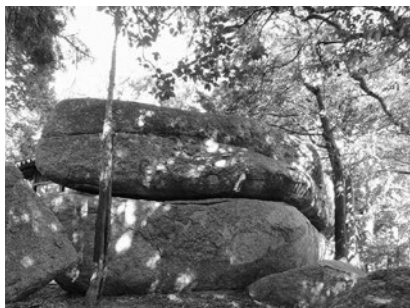


写真61 交合石



写真62 コウゴシドン

りをしていた場所だと分かります。

これは中四国地方で、こちらは岡山県の倉敷市にある川子岩（写真59）。  
 こういう沼というか、池というか、水中にある岩で河童の伝承があります。  
 こちらは交合石といって、淡路島にあります（写真61）。こういうふうにな  
 下に石が合わさって見える。夫婦岩信仰の対象になっています。これは九州  
 の例ですが、雷山の遺跡の近くにあるのがこの香合石（写真60）。神功皇后  
 が三種の神器を納めた所と伝えられています。それから、こちらは基山町で  
 すから基肆城のすぐ近くなんですが（写真62）、コウゴシドンという、これ

は現在でもお祀りを集落の人々がされています。ということ、とにかく神籠石というのはこういう岩のことをいう言葉で、古代山城のことではないということを今日は覚えて帰ってください。

### 神籠石系山城という学術用語の変遷

その後、七〇年代末に瀬戸内海沿いで山城の遺跡が次々発見され始めました。それまでも瀬戸内海沿いには、高安城、屋嶋城、香川県の坂出に城山城、それから山口県の石城山の遺跡があつて。古代山城の遺跡があるということは分かっていました。それが七〇年代末以降、鬼ノ城、大廻小廻山、永納山、それから、これは八〇年代の終わり頃ですが兵庫県のたつの市で城山城が見つかつて、それまで九州が中心だった古代山城の分布が瀬戸内海の方にもたくさんあるということが分かってきたわけです。この時期、神籠石という名称について見直そうという動きもあつたんですが、結局そのまま使い続けることになります。

朝鮮式山城とか、古代山城とか、神籠石系山城とかいろんな名称が今日出てきて、皆さん一体どうなってるんだとお思いだと思ふんですが、一応変遷がありますので説明します。戦前は、「古代城柵」という言葉しかありませんでした。それに対して列石を巡らせた遺跡を「神籠石」と呼んでいました。それを戦後、鏡山猛先生が「朝鮮式山城」という用語を作つて、そのあと瀬戸内海でもたくさん見つかり始めたので、「神籠石系山城」という呼称が出てきます。最近、これらを全部ひっくるめて「古代山城」と呼ぼうと、こういうことです。から、いつの間にか神籠石の名前を消そうとしてるわけではなくて、こういう学問的な研究の

進展で名称が変わってきたとご理解ください。

もっと細かい話なんですが、神籠石式とか、神籠石型とか、神籠石系とか、古代山城に関する本を読んでいるといういろいろ出てくるんですが、それぞれちよつとずつ微妙にニュアンスが違います。神籠石式というのは朝鮮式山城に対する用語です。神籠石型というのは瀬戸内で見つかりましたので、瀬戸内と九州を区別しようということで、九州の方を神籠石型ということに。最終的に、九州のものも瀬戸内海の方も全部ひっくるめて神籠石系と呼ぼうと、こんな話なので、非常に細かい話ですが、それほど意味はありません。

「神籠石系」と覚えていただければいいです。

### 神籠石系山城に関する諸説

八〇年代以降の研究の動向なんですけど、地方豪族築造説とか、渡来系氏族説とか、非常に盛んだった時期があります。五〜六世紀ぐらいに造ったんだろーという事です。地方の豪族が大和朝廷に対抗するために城塞を造って戦争をしたというような反乱伝承に結び付けて捉える考え方です。次は、八〇年代の終わり頃から九〇年代にかけて根強かったのですが、斉明天皇が白村江の戦いの前に百済を助けるために九州に行った時に造ったという説です。それから、三番目は二〇一〇年以降主流の説ですが、大野城などより新しいと考える説です。私もこの説です。

神籠石系山城というのは文献に記録がない山城のことをいうとよく書いてあります。じゃあ、本当にな

のかというと、実をいうと、文献史料に興味深いものがあります。これは持統三年（六八九年）、ちようど鞠智城の繕治の時期の少し前なんですが、ここに「新城を監せしむ」という記事があります。これは「筑紫の新城」ということで昔から問題にはなっているんですが、これを普通に読むと、この時期に九州で何か築城されているということになるので、今まで無視されてきたんです。

もう一つ、六九九年には「三野城と稻積城を修らしむ」という記事があります。足利健亮先生や、私は、この三野城を久留米市の耳納山のことだと解釈して、高良山城のことじゃないかと考えています。筑紫の新城というものがあるということ、文献にも記録があるんだということを強調しておきます。

## 二・城郭研究からみた古代山城

さて、最新研究に移りましょう。どちらかというと、今日は考古学の方よりも城郭研究の方からお話したいと思います。亀田さんから版築のお話もありましたし、土器のお話もありました。赤司さんからは大野城の倉庫の話とか、少し私とかぶりますけれども、軍事技術だとか、築造技術のお話もありました。私はどちらかというと、お城の研究から攻めてみたいと思います。

### 古代山城にアプローチする方法

古代山城を攻める方法というか、研究する方法としてはいろいろあります。一つは、亀田先生がお話になっ

た出土土器から研究する方法。それから、韓国の山城からアプローチしていく方法です。それに対してもう一つ、歴史地理学というのがある、分布論ですとか、交通路ですとか、港ですとか、そういったものから総合的に山城を捉えていこうという考え方もあります。今日、主にお話ししようと思っているのは、立地とかプランのお話、それからもう一つは、城壁の造り方とか城門の形とか、そういったことをお話ししてみたいと思います。

## 分布からみた古代山城

まず分布論なんですが(図46)、北九州から瀬戸内海沿いにあるよということは今日お話を聞かれて分かると思うんですが、日本海側に全然ないんです。島根や鳥取など、大陸に近いですし、あつてしかるべきだなど思うんですが、一城も見つかってません。それから、九州の方は、特に有明海沿岸といわれている筑後地方とか、佐賀地方とか、こちらの方にはたくさんあります。ここは磐井の反乱でも有名な所ですが、筑紫君磐井だとか、そういう九州勢力に関連

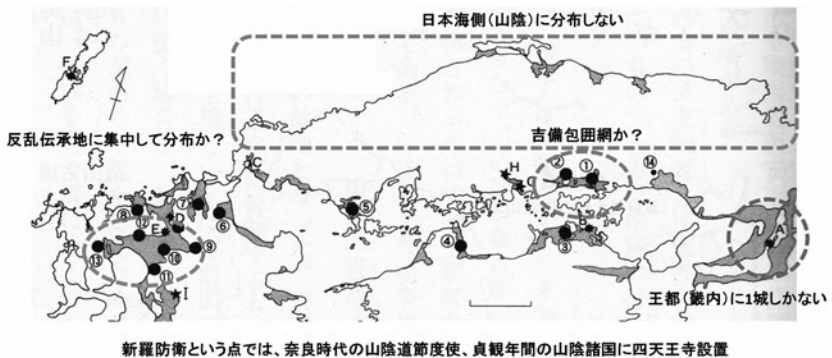


図46 古代山城の分布にみる問題点



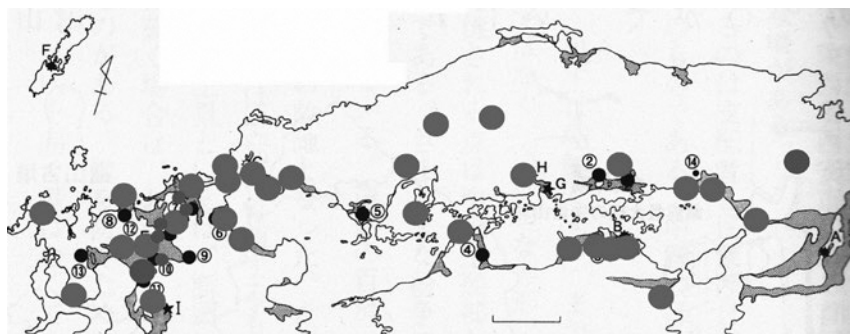
してるのではないかという説は、この辺から来ています。それからもう一つ、近畿地方ですね。高安城一城しかありません。これも何か奇妙な感じを受けます。

もう一つ、これは「吉備包囲網か」と書いたんですが、播磨の城山城、香川県の屋嶋城と城山城、讃岐ですね、それから備後の常城と茨城、それから、岡山県の北部にも終末期の古墳があつて、ちょうど吉備中央を取り囲むようなかたちで山城や古墳があるので、吉備包囲網ではないかという説もあります。

新羅に対する防衛という観点では、山陰側なんですが、奈良時代には山陰道節度使という、新羅に対する軍備強化と国内の動揺を抑える目的で、節度使が置かれますし、貞観年間というのは平安時代に入りますが、山陰諸国に四天王寺を各地に置いたりして、新羅を調伏したりしています。ですから、山陰側にお城がないというのは対外的な防衛という面ではちょっと腑に落ちない点です。

### 烽・大宰総領制・山陽道

じゃあ、北九州から瀬戸内海側沿いにずっと分布しているということは、どういう意味を持つのかということですよ。一つは烽（とぶひ）、狼煙ですね。先日といっても9月の初めですが、大阪で古代山城研究会が、狼煙について研究会をやりました。一二〇人ぐらい集まって頂き活発な議論があつたんですが、その中で発表した「ヒノヤマ」地名の分布を持ってきました（図47）。ヒノヤマというのは、下関に火の山公園というのがあるので、ご存じの方もいるかもしれませんが、烽があつた所です。水城と一緒に設置された烽です。



ヒノヤマ=烽(とぶひ)推定地も北九州から瀬戸内海沿いにベルト状に分布

写真47 ヒノヤマ地名の分布

北九州から近畿の都までずっと烽があったといわれてるんですが、ヒノヤマというのが烽のあった所ではないかといわれています。ちょうどその分布が瀬戸内側沿いなんです。他の地域にはありません。

もう一つ、これは仁藤先生のお話にあった大宰総領制との関係です。大宰・総領が置かれた所というのは、筑紫はもちろんですが、周防、吉備、伊予。こういった地域というのは、伊予には永納山がありますし、吉備は鬼ノ城と大廻小廻です。周防には石城山があるというかたちで分布が重なることは、はっきりしています。

それからもう一つ、山陽道。畿内から筑紫の大宰府まで伸びている道は唯一の大路というか、一番大きな交通路として重視されていきました。ですから、やっぱり近畿地方と北九州地方を結ぶこのラインを守るというか、押さえるという意味が強いのだと思います。

## 国郡境や軍団との関係

七世紀後半の地域の再編成ということも考えています。古代山城の占地している山をいろいろ調べますと、国郡境に沿って、国とか郡の境ですね、そういった所に占地しています。それから、駅路に沿って配置されていて、これが二〇キロメートル間隔という、計画的な配置をしています。これは、あまり防衛的ではないと思われます。

それから、これは西海道についていえることなのですが、西海道の軍団制について、各国別に軍団が何個あったかということが記録に残っています。この数が、例えば豊前ですと二軍団なのですが、神籠石系の山城も二つあると。それから筑後の国も二個、肥前の国も三個と山城と軍団の数が合うんですね。これも何らかの関係があるんじゃないかという、示唆的、蓋然的な情報です。

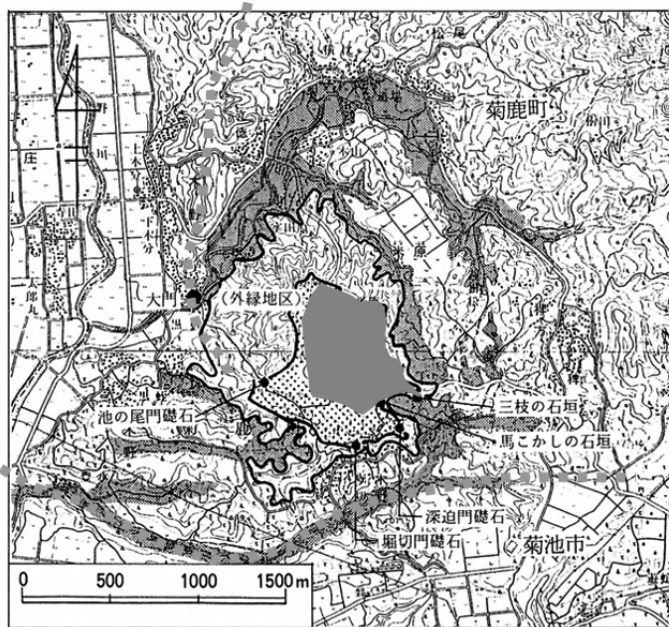
## 占地と縄張り

次は、占地とか縄張りについて、赤司さんのお話とちよつとだぶてしまっていますが、最近の研究では縄張り研究ということがあまり重視されていません。お城の研究では縄張りの研究というのは非常に重視されているんですが、古代山城ではあまり研究されていない。古代山城もお城ですから、やっぱり縄張りとか、占地やプランということを研究していかないといけないと思うんです。研究しているのが考古学者ですから、どちらかというと、構造研究の方がかりが重視されていますが、縄張り研究と構造研究というのは車の

両輪なのだと思います。

占地について、山の高低だけでは防御的かどうかは分からないということをご説明しましょう。鞠智城の立地する地形は低い低いと言われて、一〇回ぐらいのシンポジウムでもずっと言われ続けていますが、詳しく一日中かかって鞠智城の周辺を歩いてみますと、たいへん要害といえる地形なのです(図48)。なかなか攻めにくい。一つは、鞠智城はここなんです、南の菊池市の方にはここに断崖があります。ここにもあります。北側はずっと山地が巡っていて、まるで鞠智城を守っているようなんですね。鞠智城の、内部には平坦面としてこれだけの面積があります。

同じように低い地形に立地する女山城なんです、内部の平坦面というのはこれだけしかないんです(図49)。ですから、同じ低い所にあるといっても、これだけ内部の面積も違うし、女山城は平野側にむき出しの状態なんです。で



(注) スクリーントーンは迫地を意味する。

図48 鞠智城平面図



図49 女山城平面図

すから、全然防衛的な占地をしていない。こういう違いがあります。だから山の高低だけで、山が高いから防御的に強いとか、低いから弱いとか、そういうことではないといえます。

関東地方だと、良い例で、忍城の戦いを描いた『のぼろの城』という映画があったと思いますが、忍城というのは行田市にあるんですが、平地の沼地の中にある城です。ああいう低い所にあっても周りが沼

地だと籠城戦で強いんです。こういう例は、戦国時代の戦史を見ていればあちこちにあります。ということで、占地が重要だという話でした。

### 水際防御と縦深防御

それから防御戦術というか思想について、これも、日本人にはなじみがないかもしれませんが、「水際防御」という言葉と「縦深防御」という言葉。これは元寇防塁の配置図なんですけど、日本人は防衛というところの方が好きなんです。水際で侵略軍を守って戦うという。ただ、水際防御は、このラインで守れたらいいんですが、どこか破られたら次がないんです。古代山城は博多湾からずっと引いて、二日市地峡帯に大野城、

水城、基肆城というふうに配置されています。もちろん博多湾でも戦うんですが、いったん引き下って守るという布陣です。これを縦深防御といいます。百済の達卒たち、將軍たちは縦深防御の戦法を取ったということは明らかです。何といっても唐とか隋の大軍を破った高句麗はこの戦法を取っているからです。

### 横矢がかり

城門の防御ということで、「横矢がかり」という言葉をご存じでしょうか。これも中世のお城の研究ではよく出てくる言葉なんです。城門防御の基本です。これは新羅の赤城という山城の北門の写真です（写真63）。研究会の会員でドローンを使われる方が空撮したもののなんです。ここが城門です。この部分が飛び出しているでしょう。敵がこちらから入ってくるんですが、飛出した部分から横から攻めるのを横矢がかりというんです。これは非常に有効です。北門では左側から入っていますけど、本当は右側から入らせて、右側から叩く方がいいんです。何故かという、盾は左手で持ちます。右手に刀ですから、右から攻撃される方が弱い訳です。この横矢がかりは鬼ノ城です



写真63 韓国 丹陽・赤城 北門

とか、御所ヶ谷もそうですが、大野城にもあります。横矢がかりを意識した城門の防御、古代山城を見る時にも使えますので覚えて帰ってください。日本の古代山城は、最初は防御的な城門を造ってるんですが、だんだんと防御性の低い城門になっていきます。

### 築城にかかった日数

次に、土木量と築城期間について、どれぐらい築城に時間がかかったかということ、よく怡土城が二年かかったから一〇年ぐらいかかるだろうとか、四年ぐらいだろうとか、いろいろ議論されていますが、そんなに長くはかかっていないと思います。築城には土木工事（普請）と建築工事（作事）があるんですが、何といっても築城は土木です。近世城郭だと秀吉の石垣山一夜城の八〇日間、名護屋城だと八カ月です。戦国期の城館、これは竹井英文さんの研究なんです、群馬の金山城で七〇日間とか、肥後の花山城だとわずか二日間というのもあります。これはソウルの漢陽です。ハミヤンと読むんですが、ソウルの外郭城を、一八キロあるんですが、九八日間で造ったという記録があります。

結局、土木工事というのはあつという間にやらないといけないんですね。人数をかければ出来ます。城門とか建物というのは建築技術を持っている工人がいないと出来ない、そんなふうに考えています。

これは石城山の場合を計算してみたんですが、六万立方メートル、一〇トンダンブカーで一万台ぐらいの

土木量です。のべ二七万人なので、当時の周防国の人口で計算しますと、一戸から三〜二人徴発して六三日間。一戸というのは、国、郡、里（郷）の最後の単位で郷というのがありますが、一郷が五〇戸です。そこから一人徴発すると一二五日かかります。また、一〇カ所ある九州の神籠石系山城といわれている所を全部集めた数と、金田城、大野城、基肄城、鞆智城、この四城を足した量と比べてみますと、両方とも三〇万立方メートルとなりほぼ同じです。ただし、神籠石系山城は土塁をちゃんと造っていなかったり、全部列石が巡っていないかったという話もありますから、もっと土木量は少なくなると思います。このことから、大野城だとか基肄城の築造にかかった土木量がどれだけ大きかったかということが分かります。

古墳と比較してみると、山口県の能毛地域にある前方後円墳三基の土木量は合計しても石城山の半分ぐらいです。それから、群集墳という小さな古墳と比較すると六〇〇基分になります。結局、古代山城をこういう労働力の面から考えると、地方豪族のレベルで築造できるしろものではありません。もっと小さな城ならできるとは思います。

韓国には、こういう築城の記録を記した「刻字城石」という石碑も見つかっています。これは慶州の南山新城碑ですが（写真64）、現在まで一〇基発見され、三年以内に崩壊すれば罰せられる誓約や受作した工区（平均一九メートル）を辛亥年（五九一年）二月二六日に完成したということが書かれています。それから、これは明活山城の作城碑で、これも慶州の山城ですが、高さ一五メートル、長さ二五メートルの城壁を三五日間で完成したということが書いてあります。三五日ですから、そんなに長い期間ではありません。長さ二〇



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20  
 ① 辛亥年二月廿六日南山新城作節如法以作後三  
 ② 年崩破者罪教事為聞教令警事之阿良邏頭沙喙  
 ③ 音乃古大舍奴舍道使沙喙合親大舍營沽道使沙  
 ④ 喙△△倪知大舍郡上村主阿良村今知撰干柒吐  
 ⑤ △△知余利上千匠尺阿良村末丁次干奴舍村次  
 ⑥ △△祀干文尺△文知阿尺城使上阿良沒奈生上  
 ⑦ △△尺阿共△次干文尺竹生次一伐面捉上弥印  
 ⑧ △門捉上知祀次派捉上首余次小石捉上辱テ次  
 ⑨ △△受十一歩三尺八寸



写真64 南山新城碑（第1碑）

メートル程度、二〇〇カ所ぐらいの工区に分担して工事を行う訳です。

### 城壁の構造

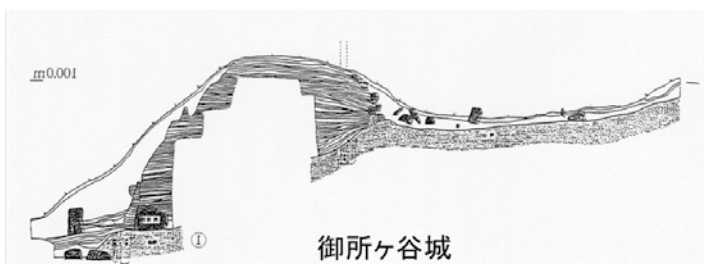
城壁構造については、「型式学」が重要です。型式学って何だということですが、考古学の話でよく出てくるので、くまモン“でちよつと説明してみたいと思います。これはくまモンの移り変わりで、最初の細いのが初期型です。これがⅡ型。ちよつとかわいらしくなります。これがⅢ型です。一番いろいろいたずらをやるくまモンです。もう一つ、最近こういうのが出てきました。

中国のくまモンです。“偽モン”といわれてます。色が微妙に茶色になっていますし、頭もなんか変ですよね。これを「型式の崩れ」といいます。九州の神籠石系の山城は中国のくまモンに似て

いるという感じがします。

城壁の形を見てみましょう（図50）。朝鮮半島ではこういう外と内に壁を持つ城壁が多いんです。その中でもこういう「内托」と呼ぶ内側に低い壁のあるものが多いんですね。それに対して日本の古代山城は「土

## ①内托



## ②土段状

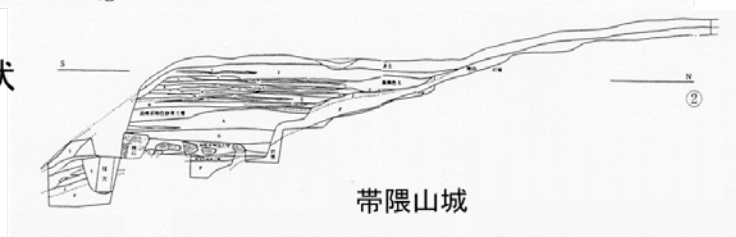


図50 日本の古代山城の版築土塁断面図

「段」状の城壁が多い。これは簡略化された城壁で日本独自の形です。韓国研究者に聞いてみましたが、こういう形の城壁はないそうです。それから石塁については、石の積み方による分類だとか、石材による分類とかいろいろありますが、これは韓国の山城ですが、乱積み、割石積み、切石積み。これだけバラエティーがあります。どちらかというと切石積みが新しいんですが、新しい時代にも自然石や割石の城壁はあります。結局、築城地でどういう石材が利用できるかということが一番大きいのです。

日本の石垣と韓国の石塁の違い。これも覚えて帰ってください。赤司さんのお話で栗石（グリ石）という言葉が出ましたが、これは姫路城の石垣の断面です（写真65）。石垣って外から見ると似ていますが、日本の近世のお城の石垣の中はこういう、玉石というか、川原石が充填（じゅうてん）されています。この石垣内部の小さな石が栗石です。それに対して韓国のお城はこういうふう内部まで大きな石材で積み上げられているんです（写真66）。先ほど大野城の石塁内部の

先日、丸亀城の石垣が大きく壊れたニュースが流れましたが、原因は今年七月の西日本豪雨とその後の台風、何回も来ましたが、これらが影響しています。持ちこたえられなくなつて、どこか外側の石がずれると中の栗石が全部出てしまうんです。韓国の石墨の工法には、打墨法や井桁積み、内部を版築で造る月坪洞式などいろいろあります。版築土塁についても、これは扶余・東羅城の断面図なんです（図51）、すごく凝った構造になっています。日本の古代山城では背面版築とか、基礎版築というものはありません。やはり簡略化されているとみるべきでしょう。それから、列石についてですが、韓国では7世紀に登場して、9世紀以降に普及する工法です。そういう意味では日本の列石というのは、韓国で出始めた頃に導入されて、その



写真65 姫路城石垣断面



写真66 韓国 忠州山城 石墨断面

写真が出ましたが、大野城は韓国の城壁に近いと思います。栗石仕様というのは日本の気候に影響していて、土庄の低減ということもありますが、やっぱり排水ですね。韓国の城壁というのは城壁内に水を入れないうようにしているのですが、日本は雨が多いせいでしょう、ある程度城壁内に浸透させて排水するということを考えているようです。

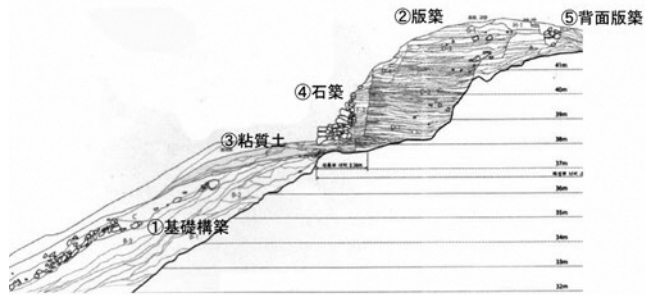


図51 韓国 扶余・東羅城 版築土塁断面

後大きな石を使うように独自に発展していったというふうに考えています。

### 新しい土木技術や建築技術と古代山城

この時代の新しい土木技術として、花崗岩に対する切石加工の技術ですが、それから、韓国から導入されなかった技術として矢穴の技術など、いろいろあります。当時入ってきた技術もあれば入ってこなかった技術もあります。もしかしたら教えてくれなかったのかもしれませんが、版築の技術なども、飛鳥寺が五八七年造営で、近畿地方には早くから入ってくるんですが、地方レベルで広がっていくのは古代山城の築城の頃からなんです。

最後に門礎石の話をしてしましょう。唐居敷（からいじき）というんですが、こういう丸い柱を添えるタイプと四角い柱を添えるタイプがあります。方立が長方形のものが百済系で、方形のものが高句麗系のようです。

まとめになりますが、縄張りや構造を見ていきますと、日本の古代山城は縄張りの的には、高句麗を志向してるようです。倭国の政権首脳部、天智天皇や中臣鎌足たち、クライアントとしては、高句麗みたいな強い城を造ってくれというふうに頼んだんですが、頼まれたのは百済の將軍たちですから、城壁の造り方などは百済型を基調としつつ、日本に住んでいた渡来系の人たちの技術、新羅

だとか高句麗の技術も使っています。ただ、その後急速に日本化していく。これが日本の古代山城のあり方なんだと思います。

ということで、あまり写真などいろいろとお見せできなくて申し訳なかったんですが、駆け足ですみません。お城として古代山城を見ていただきたいなと思って今日のお話をしました。神籠石という名称についても、ああいう祭祀の対象となった石や岩がいっぱいあるんだということを覚えて帰ってください。よろしくお願いします。ありがとうございました。